

第一四章・マムンド溪谷に戻る

「私は再び、私たちがスポーツをした丘を訪れる。

私たちが泳いだ小川、そして戦った野原を。」

「ハロー校を遠く眺めて」バイロン

あいまいで漠然とした満足感とともに、マムンド溪谷の入り口にあるイナヤット・キラの塹壕で囲まれたキャンプに私は再び読者を導く。ここでは非常に多くの出来事があり、非常に多くの思い出と経験がそれに結びついている。軍隊がいなくなった今、生活と活動の場は寂しく静かになっている。そこで倒れた将校と兵士の墓は、平野の中で所在が分からなくなっている。しかし、その名はまだ少なからざる英国の家庭で記憶されており、打ち捨てられた塹壕の陣地を見るにつけ、部族民は第二旅団の訪問を簡単には忘れないであろう。

一五日の午後、キャンプが最初に設営されたとき、小さな急ごしらえのシェルター塹壕だけがキャンプを囲んでいた。しかし、数週間が経過するにつれて、胸壁はより高くなり、溝はより深くなり、穴はより多くなり、場所全体が要塞となった。防御側を側面攻撃から守るため、境界線に沿って防弾壁が構築された。土と石の巨大な壁が馬とラバを守った。キャンプ全体の周りの五〇ヤード外には突撃を挫くための仕掛け線が慎重に敷設されており、入り口に通じる小道と轍は踏み固められて平らな道になっていた。永続性の面は気休め程度であった。

九月一六日の戦闘以来、第二旅団は移動できなかった。輸送―軍隊の生命と魂―は、ここより未発達ではない国（*！）でそうであるよりもさらに重要な要素である。旅団の機動性は荷を担ぐ動物に完全に依存している。一四日に多くのラバが殺された。一六日に野戦病院は負傷者で一杯になった。負傷者を運ぶことができなかったため、キャンプが移動できなくなってしまった。彼らを残して移動することは不可能であった。彼らのための十分な護衛を差し引くと、旅団の残りの人数は戦うには少なすぎた。したがって、第二旅団は居座っていた。その攻撃力は出撃と帰還の行軍に限定されていた。ピンドン・ブラッド卿がとった最初のステップは、負傷者を基地に送り返すことによる機動性の回復であった。部隊の構成にもいくつかの変更が加えられた。今やモーマンド野戦軍に合流している第一ベンガル騎兵隊の後をガイド騎兵隊が引き継いだ。とても深刻な損失を被った第三五シーク隊はパンジコラ川から来た第三一パンジャブ歩兵隊に入れ替えられた。皆が発熱していたバフ隊はマラカンドから来た王立西ケント連隊と交代した。その週の戦闘で今や砲が四門に減り、将校の半分、ラバの三分の一、部隊の四分の一を失った第八英国山岳砲兵隊に第七隊が取って代った。

負傷者を運ぶためのラクダが、パンジコラから送られた。バフ隊は連絡線を下る長い護送隊を護衛した。キャンプの誰もが彼らを見るのが最後になることを残念に思った。今週の戦いで彼らはイギリス歩兵大隊がすべての混成旅団のバックボーンであることを明らかにし、現役において獲得するのが非常に難しく、失うのがとても容易な、羨ましくなるような名声を確かにガイド歩兵隊と共有したのであった。

九月二四日ピンドン・ブラッド卿はティラ遠征軍第一師団の指揮官に任命するというデイスパッチを受け取った。マムンド・ジルガとの交渉が進行中であり、合意に達する可能性があると思われたので彼はそのスタッフとともにパンジコラに赴いた。ここで彼は電線とつながることによってインドと簡単かつ迅速に通信でき、同時にイナヤット・キラでの出来事の進行を見ることができるのである。デイビス氏はマムンド族との外交関係を指揮した。二六日、部族のジルガがキャンプに入った。彼らは服従のしるしとして四〇〇〇ルピーを預け、五〇丁の銃器を持ち込んだ。ただし、これらは最も古く、最も時代遅れのタイプであり、そして明らかに非常に多くの兵士を死傷させた武器ではなかった。このことが部族の代表者に突き付けられた。彼らは他に何もないと抗議した。自分たちは貧しくその財産は政府のなすがままである、と彼らは言った。しかし他の武器は持っていない。

政務担当官はきつぱりとしており、その条件は明確であった。一六日に第三五シーク隊から捕獲された二二丁のライフルを引き渡さなければ、村を破壊する。他の条件は受け入れない。これに対して、彼らはライフルを入手しなかったと答えた。それは皆、クナー溪谷から来たアフガニスタンの部族民によって持ち去られた、と彼らは言い、それは真実であったと私は思う。これらは引き渡せない。それに加えて―これも真実であるが―彼らは「フェアな戦争」に囚われていた。

カルカッタに数年間住んでいた一人の男はこの件に関して特に雄弁で、なかなかの技量でこの事件を論じた。しかし、デイビス氏に「部族の中には長老がいなかった」のか、なぜ彼らは「バブ」[現地吏員―東洋のお役所仕事の権化]に導かれたのか」と尋ねられて彼は打ちひしがれた。議論は彼らとイギリスの権力との不和の問題全体にまで拡張された。彼らは、マラカンドとチャクダラを攻撃するために若者を送ったことを認めた。「世界はすべてガザ（*イスラム聖戦）に向かっていた」と彼らは言った。自分たちは遅れをとることができなかった。彼らはまた、マルカナイのキャンプを攻撃するために谷から五マイル離れて出かけて行ったことを告白した。なぜサーカーは村を焼き払ったのか？と彼らは尋ねた。自分たちは仕返しをしようとしただけである―自らの名譽のために。これらはすべて政府の観点からすると最も不満足な心的態度を示しており、部族がより従順な態度をとるまでは旅団が谷を立ち去れないことは明らかであった。問題は重要なポイントに戻った。

彼らがライフルを引き渡すかどうか？これに対して彼らは仲間の部族民に相談して翌日に返答する、と曖昧に答えた。これは事実上の拒否に等しく、二七日に返答がなかったため、交渉は終了した。

これと、ディリとバジャウル全体の部族民の脅迫的な態度の結果、ピンドン・ブラッド卿はインド政府に電報を送り、この地域において大部隊を維持することを推奨した。これにより、彼はティラ遠征の司令官を事実上辞任した。この私心のない決定は全軍に最も爽快な満足感を与えた。政府は將軍の助言を受け入れた。ティラ軍は再編成され、W・P・シモンズ少将が第一師団の指揮官を引き受けた。ピンドン・ブラッド卿は一個大隊、七個戦隊、三個砲兵隊を自由に使えることになり、現地の状況に適切に対処するように指示された。彼は直ちにマムンダ族に対する懲罰的作戦を再開するようジェフリーズ將軍に命じた。

これらの命令に従い、二九日に第二旅団は谷の中央にある一二から一四の村をすべて破壊し、三〇以上の塔と砦をダイナマイトで爆破した。谷全体が煙で満たされており、煙は濃い多数の柱となって上向きに渦を巻き、破壊現場の上空に雲のようにかかっていた。解体の継続的な爆発音は砲撃に似ていた。軍隊と公然と争うことができない部族民は、むつつりと丘の中腹にとどまり、騎兵隊のパトロールに対する長距離射撃に甘んじた。

今は村を燃やすという問題を議論するのにふさわしい機会であると思う。私は独立した公平性をもって英国人と部族民との間の紛争の進展について述べてきた。私は同様の精神をもって、採られた攻撃方法の審理に取り掛かろうと思う。イギリスではこの問題について多くの誤解が存在し、そのいくつかは並外れた無知によって引き起こされている。下院議員の一人は国務大臣に、村を罰する際に犯罪関係者の家だけを破壊するように注意したかどうかを尋ねた。細心の注意を払った、という答えが厳かに返ってきた。軍隊がおそらく村へ銃剣を持ち込み、それを激しい反撃に備えて構えており、あらゆる瞬間が命の損失と危険の増大を意味するとき、どれが「犯罪関係者」の、どれが無実の人々の家なのかを慎重に判別して回る光景は十分にばかっている。別のメンバーは、「村が破壊されたのか、要塞だけが破壊されたのか」と尋ねた。「要塞だけである」と大臣は無邪気に答えた。実際はどうだったのだろうか？アフガニスタン国境近辺では、すべての男の家は彼の城である。村は要塞であり、要塞は村である。すべての家には銃眼があり、塔があるかどうかは単に所有者の財力の問題である。ある三代目の国会議員はその楽しい週刊誌のコラムにおいて問題をちよつとした長さで論じ、そういう戦術の野蛮さについてコメントした。それは野蛮であるだけでなく、無意味であると彼は断言した。村の住民はどこへ行ったのだろうか？もちろん敵の元へ！これはおそらく、実際の事実の最も著しい誤解である。この筆者は部族民が戦闘をする正規軍と、自分の仕事を続け、おそらく過度の軍事費に時々抗議する、

平和で法を守る人々から成っていると想像したようである。実際には、これらの地域全体において全ての住民は石を投げるのに十分成長した最初の日から、引き金を引く力が残っている最後の日まで兵士である。そしておそらくその後共同体の足手まといとして殺される。

私は村を焼くことの合法性の問題をこうした正確な事実を知った上で、読者が自ら吟味することを勧める。インド政府の命令と英国の人々の黙認の下に移動する、英国の旅団のキャンプは夜間に攻撃される。いくらかの貴重で費用のかかっている将校、兵士、輸送動物が殺され負傷する。襲撃者は丘に退却する。彼らを追いかけてそちらに行くことは不可能である。彼らを捕まえることはできない。彼らを罰することはできない。残る救済策は一つだけである。その財産を破壊しなければならぬ。「インド边境とキューバでの村の焼失の影響の対比を少し考えてみると面白いかもしれない。キューバでは反乱を起しているのは人口のごく一部であり／残りは共鳴者である。これらの生ぬるいパルチザンを戦闘温度まで加熱するために反乱者は村を破壊し、砂糖を焼く。これにより住民の前に「戦いか飢餓か」の二者択一の選択肢を置くのである。これは住民に彼らが皆嫌っているスペイン人に対して武器を取らせ、戦野において反乱軍に加わらせるといふ効果を持つ。このようにキューバでは、政府は財産の保護に尽力し、反政府勢力は財産の破壊に尽力する。ウェイラー將軍が彼らをすべて町に集め、あのような痛ましい結果をもたらしたのは、動揺する住民の忠誠心を保つためであった。彼の政策は非情だったが根拠あるものであり、それが強健な軍事作戦を伴っていたなら成功していたかもしれない。」彼らの村はその良い行いのための抵当に入っている。彼らは完全にこのことに気づいており、キャンプや輸送隊を攻撃するときにはコストを考慮し、その価値があると考えたときに攻撃を行う。もちろん、それは戦争の他のすべてと同様に残酷で野蛮なことであるが、人間の命を奪うことを正当とし、その財産を破壊することを不正とするのは非哲学的な心だけである。いずれにせよ、非戦闘員を苦しめることによって守備隊を降伏させるためにパリのような都市の住宅への砲撃を正当化する、という戦争の習慣を持つ国が泥の陋屋を燃やすことを非難してはならない。

公式な用語では村の焼却は通常「非常に多くの村を訪れ、処罰した」または「要塞を取り壊した」と遠回しに表現される。私はこの回りくどさを全く良いとは思わない。インド政府が示す英国の民主主義の良識に対する自信の欠如は、最も賞賛に値しない特徴のひとつである。エクセター・ホール（*ロンドンで良く政治集会が行われていたホール）だけがイギリスの全てではない／そして私たちの島の人々は健全で現実的な結論に到達するために、問題を自らの前にフェアに提示することを要求するだけである。もしそうでなかったなら、私たちは世界において現在の地位を築いていなかったことであろう。

マムンド溪谷に戻る。平野の村と丘の村の違いが強制的に実証された。二九日、平野の一二を超える村が一人の命も失うことなく破壊された。しかし三〇日にはやや話が違った。アグラ村はザガイ村の近隣にあり、ザガイ村の攻略については既に書いた。それは山々の広い凹部にあり、その上の移動は困難で、説明することも不可能なほどに絡み合った凸凹の土地の中に立っていた。大きな岩が山の険しい斜面を翻弄しており、中には高さ三〇フィートのものもあった／これらの中に散在しているのは、小屋や作物で覆われた細い段々畑で、それぞれが一〇フィートから一二フィートの大きな段となって上へ上へと続いている。同じ凹部に同時に占領しなければならぬガットという別の村が含まれていたことが、その場所への攻撃をさらに複雑なものとした。これによって、旅団は彼らの数が許す範囲よりも幅広い前線で攻撃することを余儀なくされた。ガイド騎兵隊が丘に近づいたとき、抵抗が企てられたことは明白であった。肉眼で何枚かの赤い旗が見え、双眼鏡では尾根と支脈に並ぶおびたらしい人影が見えた。戦隊が低木林の許す限り前進すると、まもなく散開した敵からの発砲があった。数人の騎兵が下馬してカービン銃で返礼した。そして八四五に銃弾の雨が降り始めた。今や旅団は以下の編成で戦闘を開始した。最左翼の騎兵隊は側面を脅かす重要な谷の上端を守った／ガイド歩兵隊と王立西ケント連隊は戦線を攻撃の中心まで延長した／第三一パンジャブ歩兵隊は村の右側の支脈に向かって移動し、第三八ドグラ隊は温存された。戦闘はガイド歩兵隊が敵の陣地の左側の尾根を強襲することではまった。ここは固く守られており、胸壁によって要塞化され、その後ろに防御者が隠れていた。ガイド隊は活発なペースで前進し、それほど発砲せずに、開けた土地を越えて丘のふもとまで進んだ。優れた遮蔽物から撃ってくる部族民は激しい銃火を継続した。弾丸はあらゆる方向にホコリを巻き上げ、もしくは空中でヒューヒューと悪辣な音を立てた／しかし距離は近く、敵が攻撃に耐えるつもりはないことがすぐに明らかになった。部隊が一〇〇ヤード以内に近づいて銃剣を装着したとき、十数人の肚を据えた男たちがまだ胸壁から発砲していた。ガイド隊のアフリデイとパシャン中隊は鋭い歓喜の叫び声を上げ、途方もない叫び声は最高潮に達し、前へ突進して丘の民だけが登ることができる丘を登り、頂上を片付けた。隣の丘の斜面には退却する部族民の姿が見られ、シェルターを見つける前に多くが撃ち果たされた。

彼らが周りの地面に打ち込まれる弾丸をあっちへこっちへと避け、丘の斜面を骨折って上っていくのを見るのは奇妙なことであった／しかしその前の一〇分間の記憶が新鮮であったため、同情の気持ちは起こらなかった。かなりの数が倒れ、穏やかに座り込み、静かに横たわった。彼らが倒れるたびに現地兵士たちは奇妙な小さな歓声を上げた。これらガイド歩兵隊のアフリデイとパシャン中隊はよく訓練された獵犬の群れと何の違いもないことが示唆される。彼らの叫び、動き、そしてその性質は似ている。

西ケント隊は今やガイド隊の右翼に並んでいた。後者が奪取したその長い尾根を守って

いる間に、イギリスの連隊は村に移動した。ここで抵抗は非常に厳しくなった。絡み合った凸凹の地面は、段々畑が時には一〇フィートの高さで立ち上がっており、丈の高い作物で覆われていた。両陣営に損失を出しながらの接近戦となった。小銃射撃の銃火は大音量に、継続的になった。右の支脈を上った第三一パンジャブ歩兵隊はすぐに西ケント連隊と手を結び、両連隊は熱く交戦した。その間、中央付近で戦闘していた山岳砲兵隊は（*パンジャブ）歩兵隊の頭上の、敵が射撃してくる高い斜面に破裂弾を撃ち込み始めた。まもなくその任務を果たすには兵員が少なすぎることが明らかになった。左翼のガイド歩兵隊は、獲得した小尾根を離れることができなかった。大きな勢力を示しつつあった敵に再奪取されないようにするためである。その結果、ガイド隊と王立西ケント隊の間に隙間ができた。これにより部族民がイギリス連隊の左翼に回り込むことが可能になった。その間に右翼の第三一パンジャブ歩兵隊も包囲してくる敵に背後を襲われた。損失のほとんどはこの状況のために起こったのである。

イギリスの連隊は村を強行突破し、その上の岩の間の胸壁に手強く陣取った敵に遭遇した。ここで彼らは急激に阻止された。先進中隊はこれらの砦の一つを襲撃し、敵はすぐに丘のさらに上へと退却した。約一五人の兵士が砦の中に入り、おそらくそのすぐ下にさらに三〇人がいた。その場所全体がより高いところから見渡されていた。敵の射撃は正確で強烈であった。

そのうちの四―五人は、たちまち死傷した。胸壁は紛れもない畏であり、中隊は退却を命じられた。ブラウン・クレイトン中尉は最後まで残って撤退を見守っている際に撃たれて死亡した。銃弾が心臓の近くの血管を断ち切ったのである。約三〇人のガジが丘を駆け下りて突撃して来たとき、残った二、三人の兵士は手を使って岩壁の上を降りていた。一五〇ヤードの距離に支援のためのウエスタン少佐の西ケント隊三個中隊がいた。彼はすぐにスタイルズ大尉に胸壁を取り返し、兵士を取り戻すよう命じた。中隊は突撃した。スタイルズ大尉が最初に石壁に到達し、ジャクソン中尉とともに残った敵を排除した。五―六人の兵士が突撃で負傷し、また胸壁の中で倒れた者もいた。この中隊の前進陣地はまもなく守りきれないと判断され、全連隊が激しく交戦している村の縁に戻るよう命じられた。

一方、オプライエン大佐の下で右翼を前進した第三一パンジャブ歩兵隊は、側面の岩尾根からの激しい銃火にさらされた。隊の攻撃は敵が粘り強く守っていた大量の丸石に向けられた。そのうちのいくつかは巨大であった。戦闘はすぐに近づいた。二個の先進中隊が一〇〇ヤード未満の距離で交戦させられた。この上、その右側面からの十字銃火が彼らの困難を追加した。そのような立場では、オプライエン大佐の存在は非常に貴重であった。点から点へ素早く移動して、銃撃を指揮し、彼に捧げられた兵士たちの精神を活気づけた。敵の狙撃手がこの目立つ人影を狙い始めるまで長くはかからなかった。かなりの間、弾丸

はその周りのあらゆる地面を打ったが、彼は無傷であった。しかし、ついには体を撃たれ、致命傷を負って戦いの場から運び去られた。

軍事キャリアの追求における他のすべてのそれとは異なる事情と環境を考察するため、小休止する。政治生活、芸術、工学において、才能があり、知恵をもって行動する人は、世の中での地位を着実に向上させるであろう。間違いを犯すことがなければ、おそらく成功を収めるであろう。しかし、兵士は外部の影響により大きく依存している。彼が他者より出世するための唯一の方法は、頻繁な戦闘でその命を危険にさらすことである。彼のすべての財産、それが何であれ、世界におけるそのすべての地位と重み、そのすべての蓄積された資本は、彼が作戦に加わるたびに新たに賭けられなければならない。彼は二〇回の実戦を経験し、勲章やメダルをたくさん身につけているかも知れない。昇進中の兵士として注目されているかも知れない。しかし砲火を浴びるたび、彼が殺される可能性はまだ運が使われたことのない最年少の下士官と同じか、おそらくそれよりも大きいのである。実験に力を注ぎ、大きな誤算をした政治家はまた運を取り戻すかも知れない。しかし無差別の弾丸はすべてを解決する。詩人が幾分冷酷に言っているように――

死んでしまったら、もう良いことはない。(*Stone—dead hath no better. 引用元不明)

オブライエン大佐はまだ若いのに、特別に大隊の指揮官に選ばれた。彼は何度かの遠征を行った。すでに彼は下級兵士の骨折り仕事を経験しており、軍職のすべてのより大きな褒賞が視野に入っていた。そして、その連隊長である大佐としての戦闘中の死は、兵士が望み得る最高の終わり方ではあるが、それが国家にとってより大きな価値をもたらしたかもしれないという点において、名誉ある生涯の突然の終了を記録するのは悲しいことである。

圧力は今や全戦線に沿って非常に強くなり、准将は軍隊が真剣に巻き込まれることを恐れて撤退を開始しよう命令した。しかし村は燃えており、敵も接近戦でひどく苦しんでいたため通常の気力で追撃しては来なかった。砲兵隊は敵の横隊から六〇〇ヤード以内まで前進し、退却路を見渡す支脈を片付けるため榴散弾の速射を開始した。砲弾は今や丘を去って砲の前にいた西ケント連隊の頭上で鋭い音を立て、尾根の稜線に沿って小さな白い煙のパフとなって爆発した。そしてそれが包含する数百の弾丸は地面を引き裂いて濃いホコリの雲とした。

戦線から発するドーリーと担架の継続的な流れが始まった。すぐに利用可能なすべての運搬器具が使い果たされ、負傷者の身体は荒れた地面の上を同志の腕によって運ばれなければならなかった。やがて撤退は完了し旅団はキャンプに戻った。後方を守っていた騎兵隊の存在は敵が丘から離れることを阻止していた。

戻ると、恐ろしい光景を見ることになった。ドーリーと担架の列の先頭には殺された兵たちの遺体があり、それぞれが縄でラバに縛りつけられていた。頭が片側にぶら下がり、足が反対側にぶら下がっていた。地面に滑り落ち、引きずられてホコリと血にまみれたシーク兵の長い黒髪は、その姿を見るも恐ろしいものにしていった。しかし他の方法はなかった。そして彼らの遺体を置き去りにし、私たちと戦っていた野蛮人たちに辱められ、汚されるよりはましであった。キャンプの入り口には負傷者を待つ外科医―袖をまくり上げた―の大きなグループが待っていた。防水シートで薬箱を覆った二台の手術台も用意された。カーキよりも茶色い（*陰鬱な）戦争の一面がある。

アグラへの攻撃の犠牲者は以下の通り…

イギリス軍将校

死亡―	J. L. オブライエン中佐	第三一パンジャブ歩兵隊
	W. C. ブラウン・クレイトン二等中尉	王立西ケント隊
重傷―	H. イサケ中尉	王立西ケント隊
	E. B. ピーコック中尉	第三一パンジャブ歩兵隊
軽傷―	W. G. B. ウエスタン少佐	王立西ケント隊
	R. C. スタイルズ大尉	王立西ケント隊
	N. H. S. ロウ大尉	王立西ケント隊
	F. A. ジャクソン二等中尉	王立西ケント隊

イギリス軍兵士

	死亡	負傷
王立西ケント隊…	三	二〇

現地兵士

	死亡	負傷
ガイド騎兵隊…	〇	四
第三一パンジャブ歩兵隊…	七	一五
第三八ドグラ隊…	〇	四

総犠牲者数 六一

ビンドン・ブラッド卿はパンジコラのキャンプで三〇日の激しい戦闘のニュースを受信するとすぐに「九月三〇日の戦闘の後、オブライエン中佐に代わって第四五シーク隊のマ

クレイ中佐を第三一パンジャブ歩兵の指揮官に格上げし、もう一つの空席を埋めるための一時的な措置として私は自分自身を配属することにした。私はこれが現地歩兵連隊へのイギリス軍騎兵隊将校の初めての配属であると思っている。私は親切に礼儀正しく扱われたので、これが最後とならないことを願うばかりである。」、援軍を連れてイナヤット・キラへ行くことを決めた。彼は第八山岳砲兵隊／第二四パンジャブ歩兵隊の一翼／ガイド騎兵隊の二個中隊を連れて一〇月二日に到着した／またハイランド軽歩兵隊と第一〇野戦砲兵隊の四門の砲にすぐに後に続くよう命じた。彼はアグラに新たな攻撃を行い、部分的に破壊されただけのガット村を焼き払う決心をしていた。そしてこの攻撃は五日に設定された。その日までに野戦砲兵隊の大きな一二ポンド砲が到着し、一四門の砲が敵の陣地に集中することになった。全員が部族民との間の問題を何としても終わらせることを切望していた。

三日、軍隊はバデライの村を奪取して焼き払うように命じられた。覚えているかもしれないが、バフ隊は一六日にそこへ向かったのち、第三五シーク隊を支援するために急いで呼び戻されたのである。村の攻撃と破壊には新たな特徴はなかった／部族民はほとんど抵抗せず、軍隊の前から退却した。しかし旅団が帰還行軍を開始するとすぐ、彼らはそれまで見られていたよりもはるかな大人数で現れた。騎兵隊はヌラーと荒れた地面の間では機能しなかったため、敵は大胆に平野へ進んだ。ほぼ四マイルの大きな三日月形となって彼らは撤退する軍隊を追いかけた。活発な小競り合いが約八〇〇ヤード幅で始まった。両方の砲兵隊が戦闘を開始し、それぞれ約九〇発の破裂弾を発射した。王立西ケント連隊はリー・メトフォード・ライフルで良い射撃を行った。旅団の大隊はすべて交戦していた。その戦力は三〇〇〇人を超えていたと推定される敵は、重度の損失を被り、部隊がキャンプに戻った二・三〇に撤退した。ビンドン・ブラッド卿とそのスタッフは作戦をじっと見守り、谷を偵察した。死傷者は以下の通り…

王立西ケント隊―	負傷一
ガイド騎兵隊―	負傷二
第三一パンジャブ歩兵隊―	死亡一／負傷五
ガイド歩兵隊―	負傷三
三八番ドグラ隊―	死亡一／負傷三

総犠牲者数 一六

翌日ハイランド軽歩兵隊と野戦砲が到着した。前者は七〇〇人以上の大戦力で行進し、見た目も素晴らしかった。それは旅団の各大隊のほぼ二倍の人数であった。病氣と戦争はたちまち戦力を低下させる。砲は困難で道のない土地を乗り越えるという大きな偉業を成し遂げた。彼らは自ら通路を作らなければならず、多くの場所で砲を手で引っぱった。こうして第一〇野戦砲兵隊は丘陵地帯を他の車輪交通よりも六〇マイル先まで進んだ。彼ら

は到着すると大変な歓迎を受けた。キャンプの全員が外へ出て、よく磨かれた長い筒を見
て満足した。山砲は七ポンド弾であったがこれは一二ポンド弾を一〇〇〇ヤード飛ばすこ
とができるのである。しかし彼らはその力を示す運命にはなかった。マムンド族は再び和
平を懇願してきた。彼らは闘争に疲れていた。彼らの谷は荒れ果てていた。秋の作物の種
をまく季節が近づいていた。援軍の到着は政府が協定を結ぶ決心をしたことを彼らに確信
させた。ディーン少佐は交渉の指揮を再開した。一方、すべての重要な作戦は中断され
たが、採餌と「狙撃」は通常どおり継続されていた。

今やこの軍勢は二個旅団を形成するのに十分な大きさであり、メイクレジョン准将が到
着すると、次のように再編成された……

第一旅団

指揮―メイクレジョン准将、バス勲章コンパニオン、聖マイケル・聖ジョージ勲章

ハイランド軽歩兵隊

第三一パンジャブ歩兵隊

第二四パンジャブ歩兵隊から四個中隊

第一〇野戦砲兵隊

第七英国山岳砲兵隊

第二旅団

指揮―ジェフリーズ准将、バス勲章コンパニオン

王立西ケント隊

第三八ドグラ隊

ガイド歩兵隊

第八山岳砲兵隊

ガイド騎兵隊

キャンプは大幅に拡張され、土地の広い範囲に及んだ。夕方にはメインストリートは活
気に満ちた様相を呈した。日が沈む前に、明るい色の戦闘帽で識別されるさまざまな連隊
の将校はスコットランド歩兵隊のパイプを聞くために集まるか、その日の出来事について
話し合ったり、翌日の成算について推測したりする。谷の澄んだ空気が夜の影によって暗
くなり、丘が均一に黒く色あせると、グループはさまざまな会食テントの辺りに集まり、
ベルモット、タバコ、会話で夕食と「狙撃」が始まる前の楽しい半時間を過ごした。

私は現役の軍隊とともに行動する幸運に恵まれなかった読者に、力の及ぶ範囲で戦争の
苦勞の埋め合わせとなるものの評価を届けられればよいと思っている。健康な、野外の生

活、生き生きとした出来事、興奮の実現のみならず期待、寛大で陽気な友情、全員に開かれていた榮譽の機会は、人生により鋭い興味と希少な喜びを与える。現在の不確実性と重大性は、過去と未来を比較的些細なこととし、心から小さな心配事を取り除く。そしてすべてが終わったとき、思い出が残る。それが貴重なものにならない人物はいない。困難に關しては、厳しくとも耐えられるであろう。死の向こう側を見ようと努力した禁欲主義者と隠遁者はいっそう悪いことを耐え忍んだ。名声を追い求め、戦争の楽しみに恵まれていた兵士は桶の中のディオゲネスや修道院のトラピスト修道団よりも大きな不愉快に晒されることはない。これら全てに加えて、彼が次の世について学ぶ機会は限りなく大きい。しかし、そのように言葉を尽くしたとしても私たちは物悲しくも頑固な事実に向面する。この逆の人生では人の心はとても退屈になり、その魂は物質的になり、その精神は貧しくなるのであるが、六ヶ月間現役で働いた者の中には、再び安全な家に帰ること、平和の心地よい単調さを喜ばない者はいない。